

## 委員会報告のうち統一見解とした事項

学会会員殿

昭和54年7月機関誌第31巻第7号掲載の会告により、委員会報告のうち学会の統一見解を要する事項の取扱いについて、決定されているところです。

今般統一見解として事項は、教育委員会で検討の結果得られた結論を委員会提案として第61巻第3号(885～890頁)に掲載し意見を求めました。

このプロセスを得たうえで平成21年12月12日の平成21年度第3回理事会で最終協議を行い、本学会の統一見解とするとの結論に達し報告、承認されたものであります。

平成21年12月12日

社団法人 日本産科婦人科学会

理事長 吉村 泰典

---

教育委員会

## Ectopic pregnancy の日本語訳について

Ectopic pregnancy の日本語訳として「子宮外妊娠」なる用語を使用することに関し、一般の言語としては現行のままでよいとしても、少なくとも学術用語としては「異所性妊娠」なる語に変更する。

## 記

## ectopic pregnancy 子宮外妊娠の日本語訳について

ectopic pregnancy の日本語訳として「子宮外妊娠」なる用語を使用することに関し、一般の言語としては現行のままでよいとしても、少なくとも学術用語としては「異所性妊娠」なる語に変更する。

## [理由]

1. ectopic なる英語の意味は「異所性」であって、「子宮外」ではない。「子宮外」に相当する英語は extrauterine であり、extrauterine pregnancy という表現も存在する。
2. ectopic pregnancy に相当する現象、すなわち異所性妊娠は、古来子宮外妊娠と呼ばれてきたのであるから、子宮外妊娠と呼称し続けたとしても何ら不都合は生じないとも考えられるが、「子宮外」と冠することにより言語上の齟齬をきたすものがあり正確性を欠く(例：卵管間質部妊娠、頸管妊娠)。この点は extrauterine pregnancy という用語について、既に海外においても指摘されていることである。

## [考察]

1. わが国の「産婦人科教科書」における「子宮外妊娠」と ectopic pregnancy との関係について

## ①現行「教科書」における取扱い

「新女性医学大系」を含めそれ以後の、現在書店に並べられている、いわゆる産婦人科または産科の「教科書」と呼べる書籍10点について、「子宮外妊娠」の項目に関し、その見出し、英文との関係、概念・定義の項、につき調べた。

見出しについて、10件のうち、8件で「子宮外妊娠」となっており、他の2件は異所性妊娠との併記となっている。英文の記載のあるものは5件であり、そのうち2件は「子宮外妊娠(ectopic pregnancy)」となっているが、3件は ectopic と extrauterine を併記する形となっている。定義に関する記述では、「着床部位が子宮腔以外の場所である」ことを以って「子宮外妊娠」とするものがほとんどであり、これは、後述する海外の教科書に記載された「ectopic pregnancy」の定義である「endometrial lining of the uterine cavity」以外への妊娠、を日本語で表現したものとみてよい。すなわち、わが国における「子宮外妊娠」の定義は、海外における「ectopic pregnancy」の定義を踏襲していることが改めて確認される。

なお、これら10件の教科書では、例外なく、「間質部妊娠」、「頸管妊娠」を「子宮外妊娠」の一つの型として分類し、見出しもそのようになっている。

## ②「子宮外」としてまとめることが何故不合理か。

「子宮外妊娠」と「異所性妊娠」を同義とした場合に、用語として言語上不合理が生じるのは、「間質部妊娠」の場合と「頸管妊娠」の場合である。これらを「子宮外」と呼ぶことには躊躇せざるをえない。頸管や間質部への妊娠は、「子宮内」への妊娠ではないのだから、「子宮外妊娠」でよいという主張もなされよう。しかし、この主張における「子宮内」は「子宮腔」が想定されているから、「子宮外」の対立概念ではない。主として漿膜で覆われ、子宮腔部までを含めた「うり」の形をした臓器が子宮なのであるから、この形態の外が「子宮外」なのである。つまり、「子宮外」の対立概念は「子宮」である。そうすると、言語の上では頸管や間質部は「子宮外」ではなく、「子宮」の範疇に入ることになる(図1)。

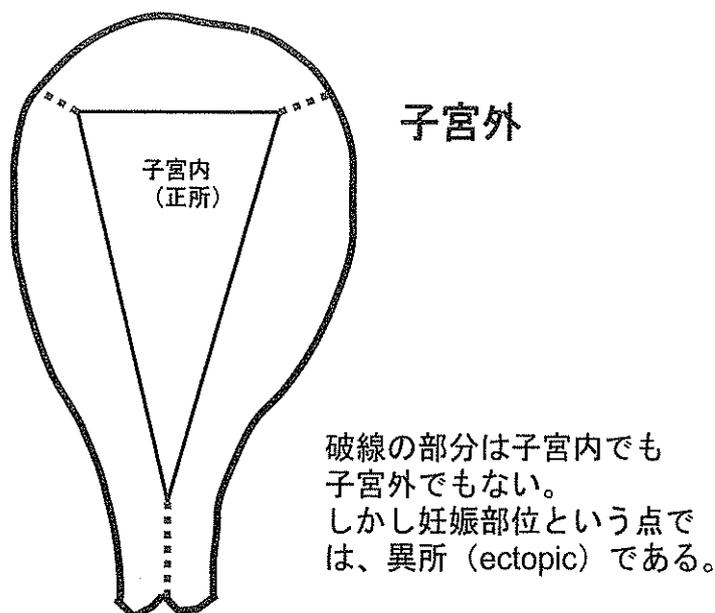


図1

ectopic pregnancy について考えてみると、その定義は「endometrial lining of the uterine cavity 以外への妊娠」であるので、「子宮」か「子宮外」かという違いで表現することが無理である。したがって、「異所性妊娠」と表現するのが適切ということになる。

#### ③過去の「教科書」の記述にみられる傾向

「新女性医学大系」より古いわが国の「産婦人科教科書」25件について、「子宮外妊娠」の見出し、欧文との関係、定義・概念の記述につき、検討した。

25件のうち23件で欧文名が併記されており、このうち、20件で「extrauterine」と「ectopic」の併記となっており、しかも例外なく「extrauterine」を優位に(先に)記してある。定義・概念についての記述を通覧すると、1970年代から1990年代にかけての教科書(17件)は、その多く(10件)が「子宮外妊娠」の概念において、着床の異所性こそが「子宮外妊娠」のもつ異常性の本質であることを考慮した記述となっており、「異所性(的)妊娠」なる用語に言及しているものが8件、「異所性妊娠」なる用語の正当性を主張しているものが4件ある(文例1)。

[文例1] 子宮外妊娠とは、受精卵が子宮腔以外の場所に着床し、妊娠が成立したものをいう。この場合の子宮腔とは正常の着床部位である子宮体部のそれを指す。したがって、厳密の意味でいう子宮外妊娠の子宮外とは、真の意味の子宮の外をいうものではなく、着床が正所的でなく、異所的であることを指す。すなわち extrauterine ではなく、eutopic に対する ectopic であり、さらに極言すれば、子宮外妊娠よりも異所性妊娠なる語がより正確なのかもしれない。(現代の産婦人科学, 金原出版, 1984, p708)

#### ④「教科書」記述の変遷からみえてくるもの

そもそもわが国における「子宮外妊娠」という疾患の概念は、その文字の表すとおり、子宮の外の妊娠、すなわち子宮以外に妊娠したものであるものであった。しかし、着床するのが子宮内膜であることが明確になるに及び、妊娠の成立する場所についても、正しい位置の内膜に着床したか否かが問題となり、「異所性」の概念が導入され、単純に「子宮外」と呼ぶことに疑問が呈されるようになる。1970年代から1990年頃までの教科書には、この疑問に関する記述が多い。この時期の教科書にみられるこの記述は、次に述べる海外の教科書での記載に時期的に呼応した動きと考えられる。

この時期を過ぎると「子宮外」という呼称に対する疑問と「異所性」という新概念の導入の是非とに関

する議論は一段落し、現在は古くから長年に渡り使われてきた「子宮外妊娠」という語を学術用語としても使用することが、そのまま続けられている状況である。

## 2. 海外の「教科書」における取扱いの変遷

今回調査した海外の教科書のうち、1950年代から1970年代のものは10編である。これら全ての教科書に共通するのは、「ectopic pregnancy」という用語と「extrauterine pregnancy」という用語が混用されているが実は異なる概念の用語である、という記述のある点である。疾患概念の解説の冒頭で、「ectopic pregnancy」の定義を述べた上で、「extrauterine pregnancy」という用語に含まれない「ectopic pregnancy」（間質部妊娠など）のあることを述べて、「ectopic pregnancy」という用語を使用すべきであることを主張している（文例2）。しかし1980年代以降になると、同じシリーズの改訂版でさえも、このような記述は消えており、「ectopic pregnancy」とだけ記載して、疾患の頻度の解説などに進んでいる。

〔文例2〕 In a normal intrauterine pregnancy the blastocyst implants in the endometrium lining the uterine cavity. Implantation identified anywhere else is referred to as an ectopic pregnancy. Ectopic pregnancy is a broader term than extrauterine pregnancy, since it includes implantation in the interstitial portion of the oviduct and cervical pregnancy, as well as tubal, ovarian, and abdominal gestation. Although more than 95 per cent of ectopic pregnancies involve the fallopian tube, tubal pregnancy is not synonymous with, but rather a very common type of, ectopic gestation. (WILLIAMS OBSTETRICS, 14<sup>th</sup> [INTERNATIONAL] EDITION, Appleton-Century-Crofts, New York, 1971, p535)

これらのことから、次のような推論をなす。過去には、「ectopic」「extrauterine」どちらの用語を使うべきかあまり明確でないか、またはどちらの用語を使用してもその意味する実体に差のない状態であったのであろう。ところが、間質部妊娠などの用語との整合性が問題となり、「ectopic」という語を使うことを徹底させることが必要となったため、「ectopic」「extrauterine」の用語の差、および「ectopic」を使うことの必然性を記述する時期があり、「ectopic」が定着するともはやその記載をする必要がなくなった、ということである。

Shaw, Soutter, Stanton の教科書「Gynaecology」には、Ectopic pregnancy の章にその診断や治療に関する近代の文献の引用がみられ、そこには次の2編が挙げられている。

Parry JS, Lea HC: Extrauterine pregnancy. American Journal of Obstetrics and Gynecology, 9: 169-170, 1876

Tait T: Five cases of extrauterine pregnancy operated upon at the time of rupture. British Medical Journal, 1: 1250-1251, 1884

これらの論文のタイトルにみられる「extrauterine pregnancy」の記述は、英語圏においても19世紀後期には「extrauterine pregnancy」の語が学術用語としては一般的であり、「ectopic pregnancy」という用語はあまり使われていなかったことを示すとも考えられる。なお、Random House Unabridged Dictionaryによると、「ectopic」という単語の起源が1870-1875年と記載され、またその名詞形である「ectopia」も1840-1850年とされている。

## 3. まとめ

欧米では、「ectopic」「extrauterine」どちらも大きな区別なく使用されていたが、uterine cavity内のendometrial liningへの着床による妊娠成立以外をその疾患の定義と定めるに及び、より厳密かつ包括的な表現として「ectopic」が正当な用語として認められることとなった。日本でも一時期このことに関する問題提起がなされたものの、議論が発展することなく、従来の「子宮外妊娠」なる用語が使用され現在に至っている。

欧米の教科書における記載の変遷をみる時、今の日本においても学術用語としての「子宮外妊娠」を「異所性妊娠」に変更する必要があると考える。

ただし、いわゆる「ことば狩り」のように「子宮外妊娠」を排斥すべきというのではない。あくまでも

教科書などに記載する学術用語としては「異所性妊娠」を使用するのが適切と考えるのであって、患者への説明の際など、通称または旧称としての「子宮外妊娠」の使用はいささかも問題はなく、今後も残っていくものである。

#### [参考資料]

##### 〈国内書籍〉(1998年以降)

- ・新女性医学大系 23 卷 (武谷雄二, 青野敏博・中野仁雄・麻生武志・野澤志朗, 佐藤章), 中山書店, 1998
- ・[改訂版] プリンシプル産科婦人科学 2 (坂元正一, 水野正彦, 武谷雄二), メジカルビュー社, 1998
- ・最新産科学異常編, 改訂第 20 版 (荒木勤), 文光堂, 2002
- ・これならわかる産科学 (岡村州博), 南山堂, 2003
- ・NEW 産婦人科学改訂 2 版 (矢嶋聰, 中野仁雄, 武谷雄二), 南江堂, 2004
- ・標準産科婦人科学第 3 版 (丸尾猛, 岡井崇), 医学書院, 2004
- ・新撰産婦人科診療 (石塚文平, 金山尚裕, 鈴木秋悦, 安田允), 永井書店, 2006
- ・臨床エビデンス産科学第 2 版 (佐藤和雄, 藤本征一郎), メジカルビュー社, 2006
- ・最新産科学異常編, 改訂第 21 版 (荒木勤), 文光堂, 2008
- ・産婦人科学テキスト (倉智博久, 吉村泰典), 中外医学社, 2008
- ・産婦人科研修の必修知識 2007, 日本産科婦人科学会編, 2007

##### 〈国内書籍〉(1997年以前)

- ・子宮外妊娠ノ診断 (白木正博), 南山堂, 1930
- ・白木産科学後編, 第 2 版 (白木正博), 南山堂, 1935
- ・新撰産科学下巻, 第 15 版 (磐瀬雄一), 南山堂, 1942
- ・新産科学下巻, 第 7 版 (塚原伊勢松), 日本医書出版, 1949
- ・産科学下巻, 第 3 版 (長谷川敏雄), 南山堂, 1955
- ・産科学異常編, 第 2 版 (加来道隆), 南山堂, 1957
- ・産科学 (上巻) (藤井久四郎, 水野重光, 森山豊, 澤崎千秋), 医学書院, 1962
- ・最新産科学異常編, 改訂第 14 版 (真柄正直), 文光堂, 1968
- ・子宮外妊娠 (澤崎千秋, 柳澤洋二), 金芳堂, 1972
- ・現代産科婦人科学大系 17 卷 A (小林隆), 中山書店, 1974
- ・最新婦人科学, 改訂 16 版 (柚木祥三郎, 川上博), 文光堂, 1975
- ・産科学異常編, 改訂第 2 版 (三林隆吉, 藤森速水), 金原出版, 1977
- ・必修産婦人科学 (小川重男), 南江堂, 1978
- ・総合産科婦人科学 (坂元正一, 倉智敬一), 医学書院, 1979
- ・産婦人科 MOOK6, 子宮外妊娠 (坂元正一, 滝一郎, 室岡一, 須川信), 金原出版, 1979
- ・婦人科学入門, 第 2 版 (鈴木雅洲), 南山堂, 1980
- ・産科学入門, 第 6 版 (鈴木雅洲), 南山堂, 1985
- ・臨床医学示説第 3 巻産婦人科 3A (森山豊, 斎藤幹), 近代医学出版, 1982
- ・現代の産婦人科学 (岩崎寛和, 玉田太朗, 山辺徹, 新井正夫), 金原出版, 1984
- ・婦人科学, 改訂第 2 版 (荒井清, 桑原惣隆, 相良祐輔, 清水哲也, 富永敏朗, 野田起一郎, 広井正彦, 藤井明和, 真木正博), 南江堂, 1989
- ・スタンダード産婦人科学 (島田信宏), 南山堂, 1990
- ・プリンシプル産科婦人科学産科編 (坂元正一, 水野正彦), メジカルビュー社, 1991

- ・産科婦人科学 [改訂] (加藤宏一, 古谷博, 一戸喜兵衛), へるす出版, 1992
  - ・TEXT 産科学 (矢嶋聰), 南山堂, 1994
  - ・産婦人科学書第1巻生殖医学 (森崇英, 飯塚利八, 谷澤修, 藤本征一郎, 富永敏朗), 金原出版, 1994
- 〈国内書籍〉(用語集・辞典)
- ・南山堂医学大辞典 (初版), 南山堂, 1954
  - ・南山堂医学大辞典, 15版, 16版, 17版, 18版, 19版, 南山堂, 1972; 1978; 1990; 1998; 2006
  - ・ステッドマン医学大辞典, 3版, 4版, 5版, 6版, メジカルビュー社, 1992; 1997; 2002; 2008
  - ・産科婦人科用語解説集 (日本産科婦人科学会編) (初版), 金原出版, 1988
  - ・産科婦人科用語集 (日本産科婦人科学会編) 第4版, 金原出版, 1995
  - ・産科婦人科用語解説集 (日本産科婦人科学会編) 第2版, 金原出版, 1997
  - ・産科婦人科用語集・用語解説集改訂新版 (日本産科婦人科学会編), 金原出版, 2003
  - ・産科婦人科用語集・用語解説集改訂第2版 (日本産科婦人科学会編), 金原出版, 2008
- 〈海外書籍〉
- ・WILLIAMS OBSTETRICS, 11<sup>th</sup> Ed, (Eastman NJ), Appleton-Century-Crofts, New York, 1956
  - ・WILLIAMS OBSTETRICS, 14<sup>th</sup> Ed (International), (Hellman LM, Pritchard JA), Appleton-Century-Crofts, New York, 1971
  - ・WILLIAMS OBSTETRICS, 20<sup>th</sup> Ed (International), Appleton & Lange, Stamford CT, 1997
  - ・WILLIAMS OBSTETRICS, 21<sup>th</sup> Ed, McGraw-Hill, New York, 2001
  - ・WILLIAMS OBSTETRICS, 22<sup>th</sup> Ed, McGraw-Hill, New York, 2005
  - ・GREENHILL OBSTETRICS, 11<sup>th</sup> Ed, (Greenhill JP), Saunders, Philadelphia & London, 1955
  - ・GREENHILL OBSTETRICS, 13<sup>th</sup> Ed (Asian), Saunders Igaku-Shoin, Philadelphia & London Tokyo & Osaka, 1965
  - ・Novak's Textbook of Gynecology, 5<sup>th</sup> Ed (NOVAK AND NOVAK), The Williams & Wilkins Company Igaku Shoin, Baltimore Tokyo, 1956
  - ・Novak's Textbook of Gynecology, 8<sup>th</sup> Ed (Second Asian), The Williams & Wilkins Company Igaku Shoin, Baltimore Tokyo, 1970
  - ・Novak's Textbook of Gynecology, 11<sup>th</sup> Ed, Williams & Wilkins, Baltimore, 1988
  - ・Beck & Rosenthal Obstetrical Practice, 6<sup>th</sup> Ed, Waverly Press, Baltimore, 1955
  - ・British Obstetrics and Gynecological Practice, 2<sup>nd</sup> Ed, (Aleck Bourne), Heinemann, London, 1958
  - ・DOUGLAS & STROMME Operative Obstetrics, 2<sup>nd</sup> Ed, Appleton-Century-Crofts, New York, 1965
  - ・Obstetrics and Gynecology, 5<sup>th</sup> Ed, (Willson, Beecham, Carrington), Mosby, St Louis MO, 1975
  - ・Obstetrics and Gynecology, 4<sup>th</sup> Ed, (Danforth DN), Harper & Row, Philadelphia, 1982
  - ・Current Obstetrics & Gynecologic Diagnosis & Treatment, 5<sup>th</sup> Ed, Lange Maruzen, Singapore, 1984
  - ・Gynaecology, 2<sup>nd</sup> Ed, (Shaw RW, Soutter WP, Stanton SL), Churchill Livingstone, New York, 1997
  - ・Medical Terminology An Illustrated Guide, 5<sup>th</sup> Ed, (Cohen BJ), Lippincot, Williams & Wilkins, New York, 2008
  - ・Biologie und Pathologie des Weibes (zweite auflage), (Seitz L, Amreich AI), Urban & Schwarzenberg, Berlin, 1952
  - ・Lehbuch der Geburtshilfe (dritte verbesserte auflage), (Martius H), Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 1956
  - ・Geburtshilfe, (Kyank H, Sommer KH, Frenzel J, Schwarz R), VEB Georg Thieme Leipzig, Leipzig, 1980
  - ・Précis D'Obstétrique, (2<sup>e</sup> Édition Révisée), (Merger R, Lévy J, Melchior J), Masson et C<sup>ie</sup>, Paris, 1961